同じ線はない 書は人なり

書家、「書の教室　優玄」主宰　天満谷蘭嘉（てんまんやらんか）さん（48）

ここに生きて

「書の面白さは、同じ線は一つもないこと。そして、『書は人なり』というように、一人一人の書の表現や人柄が出て、書いた時の気分も出ること」

函館市亀田本町の「書の教室　優玄」を主宰し、未就学児から一般まで幅広い年代に毛筆や硬筆、ペン字などを指導する。

■4歳から硬筆に触れる

硬筆が盛んな埼玉県の、ふじみ野市出身。4歳から幼稚園の硬筆教室に通い「鉛筆なのに、筆で書いたような美しい先生の字に憧れました」と、硬筆に夢中になった。鉛筆で表現された、とめ、はね、黒く光る先生の文字に近づけるよう練習を重ねた。

小3から筆を持ち、毛筆の面白さに触れた。現在まで得意とするのは、柔らかさと強さを併せ持つ行書体で、北宋の米芾（べいふつ）の臨書を好む。中高で3度、高野山競書大会（高野山金剛峯寺主催）の上位賞に輝いた。高3の同大会記念展で特別賞を受賞し、約1週間の訪中機会を得た。

中国滞在中、日本人受賞者と、中国の学生による席上揮毫（きごう）があり、中国側の繊細で美しい作品に感動した。進路に迷っていたが、帰国後、高校の教科担任から「書で頑張ってみては」と後押しされ、書の名門、大東文化大文学部へ進学。訪中からわずか数カ月での決心、受験だった。

大学では紙や筆、墨…それぞれの相性、線やにじみの出方など、書を深く学んだ。手本に学ぶ小中学校時代から、高校から大学にかけては自分を表現する書へ。これまで身につけた技術・知識を生かしての創作。自分らしい作品にするのは、楽しくも大変だった。

卒業後も作品づくりを続け、2003年の毎日書道展で会友・一般公募部門の最高賞「毎日賞」を受賞。東京都美術館に飾られた自分の作品にうれしさをかみしめながらも「もっと書かなきゃ」と心に誓った。

「小さな『書けた！』が積み重なるとうれしい。書の素晴らしさや楽しさを伝えたい」と話す天満谷蘭嘉さん

■努力を自信につなげる

社会人以降は東京の書家、西墨濤（ぼくとう）さんに師事。大学の同窓で、江差町出身の夫・貴之さん（49）との結婚を機に08年から近代詩文書を提唱した書家金子鷗亭の出身地・松前町へ。町内の小中学校で取り組む「書道科」の書道教育アドバイザー、函館大谷短大付属松前認定こども園の講師などを務め、町内で書道教室も始めた。

「教わる立場から、初めて教える立場となったが、松前の皆さんが温かく迎えてくださり、乗り越えることができた」と振り返る。

17年に函館に転居し、翌18年に「優玄」を開設。教室名は優しさの「優」、奥深さの「玄」を意味する。字が上手になりたいと願う生徒の努力を自信へとつなげる技術を伝え続けたいという。

「私にできることは書くこと。書家としても書のすばらしさ、楽しさを伝えていきたい」（野長瀬郁実）